

「猫」に関する日韓ことわざの比較研究

朴, 庚卿 / PARK, Yukyung

(出版者 / Publisher)

法政大学大学院

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大学院紀要 = Bulletin of graduate studies / 大学院紀要 = Bulletin of graduate studies

(巻 / Volume)

65

(開始ページ / Start Page)

202

(終了ページ / End Page)

190

(発行年 / Year)

2010-10-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007000>

「猫」に関する日韓ことわざの比較研究

人文科学研究科 日本文学専攻
国際日本学インスティテュート

修士課程二年 朴 庚 卿

はじめに

日本と韓国は狭い海を隔てて隣国として、また同じ漢字文化圏に属する国として、古くから密接な関係を維持してきた。その例を一つ取り上げる必要もないほど、中国に起源を置くものも含めて両国の文化や風俗の様々な面で共通の文化を有している。しかし、日本と韓国との「不幸な過去」を経てから今日に至るまで、それぞれの歴史や社会、文化などへの「眼の向け方（attention）」の相違や認識の隔たりが次第に大きくなった。

この眼差しの相違に注目して、様々な学問の分野で比較研究が行われた。周知の通り、比較研究は異なる文化を比較対照してその特性や相違点を明らかにすることを目的としており、その研究成果に基づいて、それぞれの文化の特質や国民性（あるいは民族性）について論じられてきた。その結果として、ある国や民族のそれぞれの特性や相違点が指摘され、普遍性の要素としてのある共通性をも浮かび上がらせたが、どちらかといえば相違点に重点が置かれていたと思われる。

本論は以上のような問題意識の下、既存の日韓比較研究の方法や成果に学びながら、**両国の国民性（あるいは民族性）は何がどのように異なるのか、共通している部分はどこなのかという疑問に答えるために、日韓比較研究の一環として、また新しいアプローチとして、ことわざ学と動物文化史を両者結合させて比較考察を試みるものである。** 具体的には、猫に向けられた「眼差し」を通して日韓両国の人々の意識・価値観の異同の解明を試みるものである。

私たちの身近に存在していることわざと猫に焦点を当てたのは、すでに「知っ

ている」と思う自明性のなかに、どれほど「隠された」意味が含み込まれているかに眼を向けて、日本と韓国が相互理解できる共通分母の発見を目指すものである。

いうまでもなく、前述の問題はこの小論において全ての答えを出せるものでもないし、しかも本論には新しい知識という意味においての情報も「雀の涙」のように乏しい。なによりも現在の筆者の能力をはるかに超えている問題でもある。しかしながら、本論はそれに向けての第一歩としての意味はあるだろう。その第一歩を踏み出すにあたり、欠かすことのできない基礎的な作業として、ことわざや人間と動物の関わりに関する代表的な先行研究を整理・紹介し、その成果を踏まえた上で、猫に関する日韓両国のことわざを整理・比較する作業をおこなうことにしよう。

一、ことわざの発生および定義

ことわざと呼ばれるものは、どの国においても共通して、それぞれの社会のものの考え方や価値観を簡潔・明確に言い表したものである。これらにはその地域の人々の長い年月の息吹が吹きこまれており、彼らの情緒や精神世界が刷り込まれているといわれている。しかし、いつ、誰によって作られ、誰によって伝えられたのは必ずしも自明ではない。以下ではことわざの発生および定義に関する先行研究を簡単にまとめることから始めよう。

日本においてことわざ起源説の中で最も古い説とされているのが、本居宣長の「神業説」である。本居宣長は『古事記伝』の中で、ことわざは神が人間の口を借りて発する神の心であると述べている。この本居宣長の説に近いものとして折口信夫の「呪詞説」がある。

折口信夫は、「文語に関しては、もつと立ち入った考へを述べねばならないが、其が一番適切なのは、呪詞・唱詞である。此は、永遠に繰り返さねばならぬものと信じられて居たが、段々脱落変化して、其うち、最大切なものだけが、最後に残つて、歌と諺とになつた。諺は、私の考へでは、神の言葉の中にあつた命令だと思ふ。即、神の言葉にも、次第に、会話と地との部分が出来て、其中の端的な命令の言葉が、諺であつたと思ふ」と述べているように、「ことわざと歌は同じところに発したものであり、ことばには神の意思が示されており、ことばには靈力がこもっている」とみていた古代人の発想を基本において説いている。

次に柳田国男は「ことわざ」について「最初に口の武器として、敵を困らせるために発明せられ、また練習せられたもの」と説いている。いわゆる「ことわざ武器説」と言われているもので、たとえば隣村との水争いの時、人々はことわざをうまく使う村一番の口達者を談判に送り出したことから、ことわざが「言葉争い」の武器であつたとしている。すなわち、ことわざは戦つたための言葉であつたのである。その柳田国男は『民俗学辞典』のなかでも、「ことわざを「言語の技術、コトワザの意」と述べている」。

柳田国男の「ことわざ武器説」を批判的に継承した田村勇は、ことわざの変化について最初は相手を攻撃する手段であつたものが、人々を笑わせるものへと変化していき、そしてやがては教訓を暗記するために用いられたと説明している。

近年では、ことわざが学問の資料から「ことわざ学」という学問の研究対象として市民権を得るようになった。「ことわざ学」そのなかでも、北村孝一の諸研究が注目をあびている。北村の「ことわざ観」の一端を紹介すれば、ことわざは民族・時間・思考を超えるものであるとしており、ことわざを収集してきた自らの経験に照らして、ことわざは権力が未発達な社会にはあまり誕生しないという仮説を立てている。しかし、一回誕生したことわざは権力によって支配的な価値観が一元的、体系的に確立していた時代においてもことわざは世代を超えて受け継がれるものであり、多元的で、非体系的であり、多様な価値観を提供するものと

して位置付けている」。

これまでことわざの起源説やことわざ観の変化について簡単に述べたが、以下ではことわざの定義についてみておこう。

ことわざを簡潔に定義することは難しく、ことわざ研究の最も難しい課題の一つとなつているといわれている。ことわざの定義を知る簡単な方法として、それぞれの言語の辞書でことわざがどのように定義されているか、ことわざの辞書の定義を押さえておこう。

《日本語辞典》には、「昔からいいならわしたことは、多くは訓戒・風刺などを含んだ一般的にいい伝えられる短句」、「古くから人々にいいならわされたことば。教訓・風刺などの意を寓した短句や秀句」となっており、《韓国語辞典》には、「世の中によく言い習わされているわかりやすい格言」、「民間に伝えられてきた易しい格言。世諺、俗説、俗諺、言俗、俚語、俚諺」と定義されている。ちなみに、韓国ではことわざを「ソクナム(俗談)」という。

さて、辞典的な定義をみてもわかるように、格言とことわざの区分は必ずしも明確ではない。例えば『広辞苑』(第五版)の「格言」の項目には、「深い経験を踏まえ、簡潔に表現したいましめの言葉。金言」とあり、「ことわざ」には、「古くから人々にいいならわされたことば。教訓・風刺などの意を寓した短句や秀句」とある。

北村は、ことわざ、名言、格言について、ことわざは口承性(民俗性)、庶民性、比喩性、ユーモア感覚性の面が目立ち、これに対して格言・名言は、相対的に出典作者の意識、現代性、抽象性、倫理道徳性の面が目立つという。

これからもわかるように、ことわざと格言との間には教訓的性格の違いはあるが価値判断を含む簡潔な成句という核心的な点から大差はなく、辞典などを取り上げても格言とことわざとを別々に扱っているものは見当たらない。本論では、これらをひとまとめに「ことわざ」として扱っていくが、とりあえず鄭芝淑の「昔から人々の間で言い伝えられ日常の言語生活で使われてきたが、主として作者不明の、教訓や風刺を含んだ簡潔で口調のいい慣用的表現」であるという定義に従う。

ことわざの定義の次は、ことわざの持つ多面性についてであるが、ことわざの分析のために行われたことわざの分類の仕方をみれば容易に理解できるだろう。

たとえば、宮島達夫のいうように、ものごとの形容(「何」「何する」)、一般的な真理(「何は何」「何すれば何する」)、すすめ(「何せよ」)の三つに分けて捉える方法もあるし⁽¹⁰⁾、大藤時彦が『世界大百科事典』の「ことわざ」の項で述べられているように、ことわざを「その機能によって、攻撃的・ことわざ・経験的・ことわざ・教訓的・ことわざ・遊戯的・ことわざの四群に類別」することもできる。このように、ことわざのどの面に着目し、どのような目的をもって、どのように迫るかによってさらに様々な分類の仕方がありうる。

この多面的側面によって、ことわざは「民俗学的事ことわざ研究」・「言語学的事ことわざ研究」・「歴史的・文献学的事ことわざ研究」のように民俗学、言語学、歴史学(言語史)、文献学、社会学、心理学、言語教育など様々な観点から研究がなされてきた。このようにことわざは学際的な研究の対象であり、さらには国際的な比較研究対象としてもすでに多くの研究成果が発表されている。国際的な比較の観点からなされた研究成果の中で代表的な一つに、韓国の孔泰瑛編『韓国の故事ことわざ辞典』⁽¹¹⁾があげられるが、その内容をみれば、意味内容に関する限り日本と韓国のことわざは極めて共通性が高いことがわかる。

以上、これまでことわざに関する起源説や定義などを中心に様々な着想、仮説を整理してみたが、もっとも基本的であることわざの定義というものは、今のところ暫定的な定義に頼らざるをえない。しかし、ことわざに関する新しい観点たとえば、北村が『ことわざの謎 歴史に埋もれたルーツ』で述べている「越境」としてのことわざ はことわざに関する新たな研究の可能性を示すものであるといえる。

二、猫と人間の関わり

これまで動物は人間に支配される存在に過ぎないという考え方に対して、動物と人間の関係について利倉陸は「人間を映す鏡」⁽¹²⁾といい、歴史家トナ・ハラウエイは「動物の鏡を磨いて人間を探す」と述べたことがある。どちらも動物はその地域における民族の文化的背景をもとに、その認識が規定されていることを指しているといえる⁽¹³⁾。これらの表現に表れているように人間と動物は共に生きていきながら、互に影響を及ぼし、歴史や文化を形成してきた。

かつての人間は、神話や昔話のなかで、動物をどのようなものとして捉えてきたのだろうか。信仰や儀礼、禁忌などを通じて、動物にどのように向き合ってきたのか。生業との関わりにおいて、動物はどのような存在として扱われるのか。さらには、動物との接触、生活空間での配置などについても疑問は絶えない。これらの疑問に対して一つでも答えを探るために本論では猫に注目したい。

本論の関心対象である猫について、キャサリン・M・グリッグズが『猫のフオークロア』⁽¹⁴⁾の中で指摘しているように、人間は穀物中心の農業を展開した段階から、穀物をネズミの被害から守ってもらうために「猫の世話になった」⁽¹⁵⁾が、いつしか猫を神の使いや神そのものとして崇拜するようになった。しかし、崇拜の対象であり「四つ足の恩人」であった猫は、次第に迷信や恐怖、嫌悪の対象となり、ヨーロッパ中世の魔女裁判などでもみられるように「受難」の歴史を経験しながら、現在に至っては人間に癒しを求められる存在となっている。このような猫は、時代の変化とともに人間の日常生活の中の愛玩動物として、または民話やことわざ、さらに文学や絵などの対象となり、今日でも人間を「世話している」のである。

猫が人間と関係を持ち始めたのはおよそ五千年前、アフリカのリビア地方の山猫をエジプト人が飼い慣らしたことからであるといわれている。猫は鼠の被害を防ぐために飼い始め、エジプトでは「バステト」という女神として崇められた。アジア地域においても、インド神話(ガネーシャと猫)や中国の金華猫、三脚猫などの神話が伝えられており、日本でも猫を神として祭っている猫神社がある。

世界各地に伝えられている猫に関する神話や物語の中に登場する猫のイメージは、以下の四点で共通するといえる⁽¹⁶⁾。第一、善意とも悪意とも解釈される「猫の神秘性」。第二、縁起に代表される「福の神としての猫」。第三、ネズミとの敵対関係に基づく「ネズミ捕りとしての猫」。最後に人間のいいなりにならぬ「独立性が強い猫」がそれである。

さて、本論のなかで特に猫に注目した理由は、「猫好き」や「猫嫌い」とは関係ない。犬と違って、人間と付かず離れず一定の距離を保ってきた猫に対する日本と韓国の見方は他の動物のそれにはみられない隔たりがある。すなわち、韓国人の情趣に合わないと思われる猫が日本では独特の猫の文化が形成されているこ

とに対して、「なぜ」という素朴な疑問からである¹⁶⁾。また、日韓両国の猫の表徴の比較を通じてそれぞれの有する文化や生活背景まで読みとることができると考えたからである。

日本でも韓国でも猫は穀物や仏経などをかじる鼠を捕るために飼い始められ、今日に至ったが、日本は韓国では見られない「猫の文化」を創り出した。猫を神様のように考え、猫神社で猫を祭り、福を招く招き猫やそれらの神をも商品化させ、「キティー」というキャラクターなど、猫を用いて世界的に有名な商品も作り出した。それに、猫を主人公にした文学やアニメーションなど、数多くの猫の作品が存在する。一方、韓国での猫は賢い存在で、「猫にいたずらをする」と必ず仇討ちをする」という表現に見られるように飼い猫・作品・商品の対象としてはあまり注目されてこなかった。このような日韓の猫に対するイメージの相違は猫の呼び名にも表れている。たとえば、日本の「野良猫」は韓国では「泥棒猫」と呼ばれ、嫌われている。さらに、日本で一般的に「猫じゃらし」と言われている草が韓国では「子犬の草」と言われているのだ。このような一つの動物に対するイメージの相違は何によってもたらされたのだろうか。ここではそれぞれの地域の文化や生活の相違に遠因を求めよう。

三、日韓猫のことわざの類似表現

日韓猫のことわざを分類するために本論で参考にした辞典は、以下の六冊である。日本の場合は、尾上兼英『成語林（故事ことわざ）慣用句』（旺文社、一九九二年）、尚学図書編『古事・俗信ことわざ大辞典』（小学館、一九八二年）、鈴木棠三『日本俗信辞典 動・植物編』（角川書店、一九八二年）である。

韓国の場合は、権英燮『我俗談辞典』（世創出版社、一九九九年）、宋在璠『動物俗談事典』（東文選、一九九七年）、同『我語俗談大事典・成語辞典』（教育出版社、一九九三年）である。

この六冊から「猫」に関することわざを集めた。その結果、日本のことわざは一八五個、韓国のことわざは二〇一個を数え、その際、意味が同じであっても表現が違うものは、それぞれ一つと数えた。この三八六個のことわざを対象に分類を行った。本論では、猫に関することわざを主な考察対象とするが、ことわざの

形式的・内容的特性やことわざから得られる教訓などを分析するというより、ことわざに用いられた猫の表徴の分析に焦点を合わせた。すなわち、日韓両国のことわざの中で猫がどのようなイメージで表徴されているのかに重点が置かれている。そのため分類方法は以下の通りである。

全体を大きく二つに分類する（類似のことわざ・相違のことわざ）。類似のことわざをさらにポジティブな猫・ネガティブな猫・日常生活の中の猫という項目で分類する（ここでいうポジティブの意味は、猫の持つ長所・利点などを積極的に打ちだしているものとして、またネガティブの意味は、猫の欠点・弱点・悪口などを表すことを指す）。

両国の相違のことわざを猫の表徴ごとに分類する。

このような分類の仕方により、ことわざにおける日韓の猫の表徴を考察するための最小限の準備が整ったが、とりわけ、猫の表徴の相違こそが、日本と韓国との文化の相違を最も鮮明に表わしているものではないだろうかと筆者なりの仮説を立てた。

すでに述べた通りに、分類の対象となったことわざは前述した六冊から集めたが、筆者が収集できなかったことわざもあるということをおおらかに断つておく。また、本論では集めたすべてのことわざを列挙するのではなく、特徴のないくつかのことわざに限定して取り上げた。意味の解釈は前述した六冊を参考にし、「」中に記述する。なお、韓国のことわざの日本語訳は筆者によるものである。

（一）ポジティブな表徴

日本への飼い猫の渡来は、奈良時代に中国からであると言われ、初めは社寺などで供物や仏殿や仏像・仏具などが鼠にかじられるのを防ぐため、飼い始められた¹⁷⁾。一方、韓国の方は猫がいつから飼い始められたのか、また飼われた猫は元々韓国の在来種の猫なのかどうかなど、韓国における猫に関する資料は極めて乏しい。ただ、鼠の被害から穀物や果物、蚕を守るために昔から飼ったのは事実である¹⁸⁾。猫が人間に招かれ、身近な動物になったのは猫に鼠を捕る能力があ

(表1) ポジティブな猫のことわざ

ポジティブな猫	
慎重さ	
日本	一、鼠捕る猫は爪を隠す 二、上手な猫が爪を隠す 【他四】
韓国	一、고양이는 발톱을 감춘다 (猫は爪を隠す) 二、고양이는 소리없이 쥐를 잡는다 (猫はひそかに鼠を捕る) 【他四】

つたからに他ならないが、両国のことわざにも「鼠を捕る猫」という猫の役割がとくに強調されている。殊に、鼠を捕る時の猫の姿を人間は「猫の慎重さ」という表徴のことわざで表し、猫の慎重さは人間が物ごとを行う際、見習うべきことであるという教訓を導き出している。

「猫の慎重さ」を表したことわざは両国とも同じように六つある。代表的な例を挙げると(表1)のようである。日本の「鼠を捕る猫は爪を隠す」は、「すぐれた才能や力のある者は、平素それをむやみに人にひけらかすようなことはしないとえ」とあり、韓国の「猫は爪を隠す」は「猫は鼠を捕るときだけ爪を使用、平素には隠しているよう、大切なものは隠すべき」という意味である。また、韓国の「猫は密かに猫を捕る」は、日本のことわざ「鳴かぬ猫は鼠を捕る」に該当するもので、「知らせから行う事は成功できない、事は緻密な計画を立て密かに行うべき」という意味で使われた。両国とも鼠を捕る抜群の実力を持つ猫をポジティブなイメージで表現し、高く評価していることがわかる。

(二) ネガティブな表徴

日韓両国に共通的に見られる猫に対するネガティブなイメージはいずれも前述した「鼠を捕る猫」という人間世界においての猫の役割とは関係ないイメージで

ある。猫との長い付き合いの間、人間から見た猫の習性の特徴に意味を付与したのだが、どうやら猫の習性はポジティブというよりネガティブに見えたらしい。両国のネガティブな猫のことわざは(表2)のよう「魔性」・「気難しさ」・

(表2) 日韓ネガティブな猫のことわざ

ネガティブな猫			
忘恩	ずる賢さ	気難しさ	魔性
日本	一、猫にもなれば虎にもなる 二、猫を被る 【他九】	一、猫に憎まれれば引っ掻かれる 【他一】	一、墓で倒れたら猫に生まれ変わる 二、死人の傍に猫が寄ると踊り出す 三、猫を殺せば七代が祟る 四、猫に九生あり 【他七】
韓国	一、개가 쥐를 잡고 먹기는 고양이가 먹는다 (犬が捕った鼠、食べたのは猫) 二、고양이 소리다 (猫の鳴き声(猫撫で声))	一、할퀴지 않는 고양이를 고양이없고 양갈았다는 양반었다 (引っ掻かない猫いない、気難しくない両班いない) 二、고양이 새끼는 나면서 할퀴다 (子猫は生まれた途端、引っ掻く) 【他五】	一、고양이가 관을 넘어가면 송장이 일어난다 (猫が棺を跨ぐと死体が立ちあがる) 二、고양이를 죽이면 고양이가 원수를 갚는다 (猫を殺すと猫が仇を討つ) 【他二】

「ずる賢い」・「忘恩」という四つの表徴で分類することができる。「魔性」を表す日本のことわざ「墓で倒れたら猫に生まれ変わる」の解釈をみると「墓で三遍倒れると墓猫になる。(大和奈良の俗諺)」である。猫のどのような性質から生まれた表徴であるかは明確ではない。また、韓国のことわざ「猫が棺を跨ぐと死体が立ち上がる」の解釈は「猫は死者の魂を苦しめるから、死体がある部屋に近づかせない」であり、猫が死者の魂を苦しめるという俗信から生まれ、猫はこの世と一緒に暮らしてもあの世のことと繋がりがあある不思議な存在として認識されていた。特に、日本のことわざ「猫に九生あり」は「猫は命が九つもあつて何度でも生まれかわってくる。猫は執念深く、なかなか死なないことをいう」のように解釈され、猫はこの世の人間には持つていない魔性を持つていることを表徴している。

「気難しさ」を表すことわざは、人間になつかない性格と猫の引つ掻く性質を反映しているが、特に韓国のことわざの中で気難しい猫の性質を洒落た表現を用いて当時の支配階級を揶揄した「引つ掻かない猫いな、気難しくない両班いな」ということわざは目を引く。高麗・朝鮮時代の支配階級であった「両班」は、特に朝鮮時代中期以降、支配階級としての特権を行使し、庶民を苦しめた時期の両班のことを猫に例えて、批判している⁽¹³⁾。

次に「ずる賢さ」の猫は、一見みると大人しい弱い動物に見えるが、それは見た目だけで、見た目の弱さを武器に、何かを狙っている本当の自分を見せないという猫のずる賢さを表すことわざである。日本のことわざ「猫にもなれば虎にもなる」は「猫のように大人しくもなれば虎のように狂暴的にもなる。時と場合によって、優しくもなれば猛々しくもなる。」という意味で、弱さと狂暴さを両方持つていて場合によって使うというずる賢さを表徴している。また、「猫を被る」は「本姓を隠し、大人しうに見せかける」という意味で現代の若者にもよく使われていることわざである。韓国でもそれと近似な意味で現代まで使われていることわざがある。「狐みたいな小娘」がそれであり、猫ではなく「狐」を表徴として用いた。「しづりが可愛くて利害に抜け目がない小娘」という意味で必ずしも悪い意味ではない。また、韓国のことわざ「猫撫で声」は「相手の機嫌を取ることを言う」という意味で、日本の「猫撫で声に油断するな」に該当する。即ち、聞き良い猫声を出す人は心に他意を持つことが多く、油断できないという

否定的な意味を持つ。

さらに、猫の「忘恩」という表徴は「犬の忠」によく比べられる。日本のことわざの中で「猫は三年の恩を三日で忘れる」のに比べて「犬は三日飼えば三年恩を忘れぬ」と言い、犬に比べて人になつかない猫の性質が「忘恩」という表徴で表れる。そのほか、日本の「猫の逆恨み」は、「猫は執念深くて人から恩を受けてもかえって恨む」という意味で、韓国の「子猫を育ててやると仕返しをする」と同じ意味であるが、韓国では、その意味が少し変わり、「どんな事もある段階に到ると決定的な結果があらわれる」という意味でも使われている。

(三) 暮らしの中の猫

分類のなか、最も数が多い。暮らしで猫のポジティブでもネガティブでもない、猫の性格や特徴などをそのまま表現したものの中で、両国で共通的に見られることわざである。ただ、表現の仕方における相違はあるが、意味は同じものが多い。両国で共通的に見られる暮らしの中の猫は(表3)のように「鼠を捕る」・「食べ物に目がない」・「猫の顔」の大きく三つに分けられる。「鼠を捕る猫」は、前述した鼠を捕る猫の「慎重さ」を評価することではなく、ただ、猫の役割は鼠を捕ることであるという事実を伝えている。

両国で共通的に見られる「猫の留守は鼠の代」という意味は、「猫のいない時は鼠の天下。強い者のいないときは弱い者の世の中であるということ」である。また、韓国の「捕るべき鼠は捕らず、雌鳥ばかりかみ殺す」ということわざは「やらせたことはやらせず余計なことをする人」のことを揶揄したもので、捕るべき鼠は捕らず、他の食べ物に目を逸らした猫に例えている。基本的に肉食動物部でありながら人間の身近にいる猫は、鼠だけではなく人間の食べ物に手を延ばし、人間から「食べ物に目がない猫」というイメージを与えられた。(表3)からも分かるようにことわざの中で猫の大好物として挙げられているのは「魚」である。しかし、面白いことに、両国のことわざに用いられた食べ物に違いがある。日本の方は猫の好物として主に魚が挙げられ、その詳しい名前、鰹、鮭、鱒などが挙げられている。一方、韓国は魚や貝の塩辛、牛の頭や肉などが挙げられている。また、供え物やおかず壺、食料を保管した壁蔵や肉類を保管した肉庫への出入りが挙げられている。これらのことから、両国の食生活や食文化の一面を覗き見ることが出来る。周知のように、海に囲まれた日本人は魚をよく食べ、大陸続きの

(表3) 日韓暮らしの中の猫のことわざ

暮らしの中の猫			
その他	猫の顔	食べ物に目がない猫	鼠を捕る猫
一、大晦日には猫の手も借り たい 二、猫の額 三、猫の首に鈴をつける 【他七】	一、借りて来た猫を隣の猫を 一昨日叩いたような顔してい る 二、内 마신 고양이상이다 (煙を吸い込んだ猫の面) 【他九】	一、猫が肥えれば鯉節痩せる 二、魚を猫に預ける 【他十二】	一、猫が鼠を捕るようなもの 二、猫の留守は鼠の代 【他十四】
一、 고양이 목에 방울달구리다 (猫の首に鈴を付ける工夫) 二、 고양이 이마 처럼 좁다 (猫の額のように狭い) 三、 고양이 손도 빌릴 판이다 (猫の手も借りたい) 【他二】	一、 낫대 한 고양이상이다 (墮胎した猫の顔) 二、 내 마신 고양이상이다 (煙を吸い込んだ猫の面) 【他九】	一、 생선 가게에 고양이를 맡긴 셈이다 (魚屋に猫を預けたようだ) 二、 고양이 반찬단지 드나들듯 한다 (おかずの壺に猫の出入りのよう) 【他二十五】	一、 고양이 가 없으면 생쥐가 날란다 (猫の留守は鼠の代) 二、 잡은 쥐는 안잡고 씨안뜯만 죽는다 (捕るべき鼠は捕らず、雌鶏ばかり嗜殺す) 三、 배부른 고양이는 쥐를 잡지 않는다 (満腹の猫は鼠を捕らぬ) 【他四十】

韓国は魚も肉もよく食べたこと。また、韓国の食品を保管する習慣や儒教の影響で供え物が発達したことで、猫に取られた食べ物の種類も異なっていたのである。

鼠を捕る楽しみも減ってきて、他の食べ物に目を逸らした猫が口に合わないものを食べて見せる変な顔が人間には面白かっただろうか、「猫の変な顔」を表したことわざが多数みられる。日本のことわざ「隣の猫を一日叩いたような顔している」は、「まぬけな顔」をしている猫の顔を表している。一方、韓国の方は、昔から猫の墮胎が行われたかどうか定かでないが、「墮胎した猫の顔」という表現を用いて「墮胎した猫が辛い顔をしているように苦痛を耐えられない人」に例えたことわざがある。また、「煙を吸い込んだ猫の面」や「塩を食べた猫の顔」のように食べ物などに関する猫の「しかめた顔」をあらわした表現も多い。両国の日常生活で共通的に見える猫のことわざのその他は、両国同じく「猫の手も借りたい」、「猫の額」、「猫の首に鈴を付ける」などがある。これらは日本ではよく使われているが、韓国ではそうでもない。「猫の首に鈴を付ける」は、広く知られており、よく使われているが、忙しい時をあらわした日本のことわざ「大晦日には猫の手も借りたい」は、それほど使われていない。韓国は、季節的には大晦日より秋の秋収が忙しく、「秋にはおきかき自ら働くほど」ということわざが使われている。また、空間の狭さを表す「猫の額」も韓国では、「手のひら」という表現を使うのである。

これまで両国に共通的に見られる猫の表徴を整理してみた。猫を飼い始めた時は、鼠を捕る猫の実力を高く評価し、「鼠を捕る猫の慎重」な姿を見習うべきものとしてポジティブなイメージで表徴された。しかし、長い付き合いの中で人間になつたかたの猫の性格に、人は猫に鼠を捕るありがたい動物から、「気難しくてずる賢い恩を知らぬ動物」というイメージを付与し、ひいてはこの世とあの世にかけて生きていく「魔性」を持つ動物として表徴した。なお、全体の三割を占めた日常生活の中の猫は、大きく三つに分類したが、鼠を捕る猫の役割とその役割を果たさない猫のことを表現したことわざが多かった。次は鼠だけでは気がすまない猫が他の食べ物に目を逸らし、「食べ物に目がない猫」に取られた食べ物の違いも確認できた。

また、日本のまぬけの猫の顔や、韓国のしかめた顔の猫を表現したことわざも多数あり、両方とも人々の表情を猫の顔に例えて表現していた。最後に、「猫の手も借りたい」・「猫の額」・「猫の首に鈴を付ける」などのことわざは、両国で共通的に見られるが、韓国では「大晦日には猫の手も借りたい」ということわざより、「秋にはおきかきが自ら働くほど」ということわざが使われ、また、「猫の額」よりは「手のひら」という比喩表現が使われていることを述べた。両国とも鼠を捕る猫の役割から派生した表徴に使われた素材の相違、例えば、猫の食べ物の種類の相違などは見られるが、意味や表徴はほぼ同じであるといえる。

四、日韓猫のことわざの相違表現

(一) 日本の場合

中西裕は「日本「猫」の文学史序説(一) 唐猫の頃まで」のなかで「現在、我が国の文化は猫的である」(28)と述べた。ここでは、中西裕が述べた「猫的」という日本の文化の一面を日本だけに存在することわざから考察してみる。「日本の猫」というと、筆者には、まず「招き猫」、それから、「化け猫」が浮かぶ。その理由は、日本における「招き猫」は日本文化を代表する文化コードとして、世界的に知られているが、韓国人である筆者にとっては「幸福を招く猫」という表現が新鮮に聞こえたからである。「化け猫」もまた同じように、韓国で猫は化けないということではないが、化けるものは、「猫」よりはむしろ「狐」のほうである。「招き猫」と「化け猫」などといった、日本の特有のことわざの中で「猫」はどのような表徴で表れるだろうか。

猫に関する日本特有のことわざは(表4)のように大きく五種類に分類される。「可愛がれる・猫の恋」・「女・傾城と猫」・「猫の目」・「猫と遊び」・「化け猫」がそれである。「化け猫」に関する項目が目玉が目を引くが、まず、可愛がれている猫や、猫を女に比喩した表現に注目したい。「叶わぬ恋に心を尽くより犬猫を飼え」と「子無き人は必ず猫を愛す」ということわざをみよう。前者は「上手くいかない恋で悩むより、犬・猫に愛情を注いだ方がいい」という意味で、後者は「子無き人は必ずと言っていいほど猫を可愛がる」という意味のことわざである。両方、人から得られない恋愛や情の感情を猫に求めている。また、「猫の恋」

(表4) 日本特有の猫のことわざ

可愛がれる 猫の恋	女・傾城と猫	猫の目	猫と遊び	化け猫	その他
一、叶わぬ恋に心を尽くすより犬猫を飼え 二、子無き人は必ず猫を愛す 三、猫の恋 【他七】	一、猫は傾城の生まれ変わり 二、芸妓の心と猫の鼻はいつも冷たい 三、三味線張るのは猫の皮、芸者の言うことは嘘の皮【他七】	一、猫の目のように 二、女の心は猫の目 【他三】	一、猫に唐傘 二、猫に紙袋 三、頬冠り後ろへ這う 【他四】	一、尻尾の長い猫は化ける 二、猫に踊りの真似をさせると化ける 【他二】	一、猫の子は一匹もない 二、猫も杓も 三、猫のちよつくり三軒 四、猫もお茶を飲む 五、猫舌の鉄砲喉(かまずに飲み込むこと) 六、猫舌の長風呂入り 【他十六】

は「春に牡猫が雌猫を恋つことや春に猫が交尾期になること」から生まれた「春の季語」である。このように、ことわざに表徴されている猫は、恋する相手の代わりのように考えられ、ペット（愛玩）として可愛がれた。

ことわざからは少々離れるが、古典文学の中で寛平元(八八九)年二月六日に書かれた『宇多天皇御日記』と、長保元年(九九九)九月一日に書かれた『一条天皇藤原実資の日記』小右記』でも可愛がれる猫が登場する。平安時代宮廷のペットとして飼われた唐猫の存在を記録した最古の文献である『宇多天皇御日記』(22)に登場する猫は鼠を捕る抜群の能力を持っている優れた猫として描かれている。それに、毎日乳粥を与えて飼育していたという。また、『小右記』の猫には五位の地位を与えられ、馬の命婦という乳母まで付けたという(23)。一般の人々よりも贅沢な生活を享受した貴族的な猫である。これらが示しているように、日本人の猫好きは決して現代に生まれたものではない。このように可愛がれる猫は、他方では女の心の移り変わりの激しいことの比喩的表現として「猫の瞳が明るさによって形を変える」ということから生まれた「猫の目のように」のように、「猫」女・傾城」という表徴であられる。ちなみに、『源氏物語』「若菜上」「若菜下」に登場する唐猫は、恋の架け橋、また、女三宮の身代わりになるなど、「猫の恋、猫」女、憑き物」としての多様な象徴の役割を果たしている(24)。

このように日本では「猫」が女に例えられているが、韓国では一般的に「狐」に比喩される。ことわざの中でも韓国の場合は猫を女に比喩した表現は見られないうが、狐に関することわざには女に例えられたことわざが多くみられる。たとえば、「女は老けると狐になる」「女は三日、殴らないと狐になる」(25)といったものがそれである。これらのことわざは、女性を動物に例えて男性より下位に置く韓国の女性観をあらわしていると考えられる。また、よく使われている慣用句として、前章でも述べたように、「狐みたいな小娘」というものがあり、日本の「猫を被る」と近い意味で使われている。

その他に見られる「猫に唐傘」ということわざは「猫の前でたんだ傘を急に開いて、びっくりさせること」を意味しており、(表4)に挙げた「猫に紙袋」は「猫に紙袋をかぶせると、前は行かないで後ろへ下がることから、あとすざりをする」という意味で、「猫の類冠り後ろへ這う」と同じ意味である。いずれも猫にいたすらをする内容で猫の可愛らしさを感じさせる。また、日本でよく使

われている「猫も杓も」・「猫に小判」・「猫婆をする」・「猫舌」をはじめ、「猫のちよっくり三軒」ちよっとの間に猫は三軒も歩いてしまつこと(「猫の子一匹もいない(人が全く居ないことをたとえ)」「猫も茶を飲む(猫でさえお茶を飲んで一休みする。生意気に分不相応なことをすることをたとえ)」など)のことわざは、暮らしの中で見られる猫の性質に基づいて生まれたことわざであり、韓国では見られないことわざである。

最後に「化け猫」について簡単に触れておこう。木村喜久弥の『ねこ』(26)には日本の化け猫の条件が述べてある。

- 一、尾が二股に分かれている。
- 二、化けると体が大きくなる。
- 三、毛色は主に赤、黄、三毛が多い。
- 四、非常に長寿である。
- 五、残虐性がある。
- 六、変幻自在の神通力を会得し、もつとも劫を経た物は霊を呼んで空中を飛行することができる。

(表4)に挙げた「尻尾の長い猫は化ける」と「猫に踊りの真似をさせると化ける」のことわざは、右述の条件に当てはまる。化け猫はことわざだけではなく、江戸時代には落語、歌舞伎など色々なところで化けものとして登場する。一方、韓国では化ける猫に関する話は存在するが、むしろ、人間に化けるといふイメージを持つ動物は「狐」であり、化け狐に関する伝説の方がはるかに多い。日本の「化け猫」は、横山泰子「化け猫、海を渡る」論をはじめとし、様々な研究が行われており、日本妖怪研究においても重要な研究対象として扱われている。「猫」を通じて日韓両国の文化について考えていこうとする筆者の問題関心からすれば、猫に関することわざだけでなく、化け猫に関する作品についても詳細な考察をおこなうべきであるが、それは別の機会に譲ることにしたい。

以上、日本だけのことわざを考察してみた。日本のことわざにおける猫は「化け猫」のことわざをはじめとして猫の様々な性質が細かく表現されている。猫には恐ろしい面もあるが、それより猫を女や恋の対象に比喩するなど「可愛がれて

いる猫の表現が多い。いずれも猫に愛情を持って注意深く観察した表現であり、韓国では見られないことわざである。

(二) 韓国の場合

정몽대 (Jung-dae KIM) は『33種類動物から見た韓国文化象徴体系』⁽²⁶⁾で猫についての韓国人の認識を「猫は霊を呼び起こす神通力を持っている動物であり(中略)特に、猫は自分に害を与えた人には必ず仇討ちをする動物であると思われていた」と述べた。また、猫に対して「恐ろしさ」を感じていたということからもわかるように、韓国人にとって猫は、不気味な動物であり、決して可愛いペットとしての認識はなかった。むしろ、今日には若者を中心に猫がペットとして飼われてはいるが、これも約一〇年前から現れた現状である⁽²⁷⁾。では、韓国のことわざにおける猫はどのように表徴されたのだろうか。

韓国にだけ見られる特徴的な猫に関することわざは、本論のために収集したことわざ全体の約五割を占めている。これらのことわざに関して結果を先取りすれば、ことわざの種類はたくさんあっても、基本的には「憎らしい猫」ということになる。細かく分類すると(表5)のように七つに分類される。前述したように韓国の猫のことわざは「憎らしい猫」を、様々な形で表現しているが、ここではことわざ一つ、一つを考察するより「泥棒猫が祭床に上がる」ということわざに注目し、話を進めて行きたい。まず、「泥棒猫」というのは日本の「野良猫」のことである⁽²⁸⁾。意味は「悪い人は無礼なことばかりする」ということである。「泥棒猫」は「悪い人」、「祭床に上がる」のは「無礼なこと」になる。韓国の朝鮮時代は儒教(儒学)が支配的であったため、祭祀を大事にし、祭祀用の供え物は普段は食べられない貴重なもので用意した。祖先のための供え物を猫が先に取るのは韓国人にとっては動物であれ、許されるものではなかった。しかし、日本ではこのような猫の行動について相違の認識を持っているようである。たとえば、平安前期の仏教説集『日本霊異記』⁽²⁹⁾には次のような話がある。

藤原の宮で天下を治めになった文武天皇の御代、慶雲二年の秋九月一五日に膳臣広国は急死し、三日後に生き返る。死んでいた三日間「度南の国」に行かれた広国は亡父に会う。生前の罪の報いで苦しい毎日を生きていた亡父は広国

(表5) 韓国特有の猫のことわざ

その他	猫と鼠	すばしい猫	大人しい猫	盲猫	憎らしい猫	泥棒猫	韓国特有のことわざ
一、 고양이 버릇이 쾌설하다 (猫の癖が不埒だ) 二、 쥐 밥도 고양이 주기는 아깝다 (すえたご飯も猫にやるにはもったいない)	一、 쥐 못살은 고양이 먹지는 더 먹는다 (鼠も捕れぬ猫がもつと食べる) 二、 쥐 안잡는 고양이 도 일 안하느 남편도 써 먹을 때가 있다 (鼠捕らぬ猫も働かない夫も使うところがある)	一、 약삭빠른 고양이 밤눈이 어둡다 (すばしい猫夜目が利かない)	一、 얌전한 고양이 부뚜막에 먼지 올라간다 (大人しい猫がかまどに上がる)	一、 눈먼 고양이가 병아리만 잡는다 (盲猫が雛ばかり捕る) 二、 눈먼 고양이가 눈먼짓만 한다 (盲猫、役立たないことばかりやる)	一、 미운 고양이가 병아리만 잡아먹는다 (憎らしい猫が雛ばかり捕る) 二、 알미운 고양이가 아랫목 이불 속에 동산다 (憎らしい猫が布団の中に糞をする)	一、 도둑고양이가 세상에 먼저 오른다 (泥棒猫が祭床に上がる) 二、 고양이 반찬맛을 알면 도둑고양이가 된다 (猫がおかずの味に慣れると泥棒猫になる) 三、 도둑고양이 주계에게서 가지 부린다 (泥棒猫のくせに気張ってる)	韓國特有のことわざ
【他三七】	【他三二】	【他五】	【他三】	【他三】	【他五】	【他八】	

に自分の罪が許されるように現世に戻ると供養することを頼み、次のように語る。

我飢えて、七月七日に大蛇になりて汝が家に到り、屋房に入らむとせし時に、杖を以て懸け棄てき。又、五月五日に赤き狗二成りて汝が家に到り時に、犬を喚び相せて、唯に追ひ打ちしかば、飢え熱りて還りき。我正月一日に狸に成りて汝が家に入りし時に、供養せし六種の物に飽きき。

ここでは、「狸」と書いてあるが、「猫」「狸」はネコの意にも用いられたという³⁰⁾。広国の父は死去から一年に一回、蛇、犬、猫という動物になって広国の家に現れる。一年目は七月七日七夕に蛇の姿で、二年目は五月五日端午の節句に狗の姿で現れ追ひ払われるが、三年目はお正月に猫の姿で現れ、御馳走になる。

ここで、注目すべきのことはなぜ猫だけが御馳走になるのかということ、なぜ、猫がお正月に現れたのかということである。蛇と狗が現れた七夕と端午の節句は供え物があるとしてもそれは祖先に供養する物ではない。しかし、猫が訪れたお正月は祖先のための供えた物がある。つまり、祖先が猫として現れるとして、その当時の人々には「猫を祖先として考える」認識が共有されていたと言える。広国の犬や蛇に対する態度と猫に対する態度がなぜ変わったのかについては、平安時代という時代的な背景、つまり唐から輸入されたのを何より大事にしたこと、鼠の害から助けられている「ありがたさ」から生まれたことだろう。しかし、これだけだと説明としては不十分だが、『日本霊異記』が仏教説話集であるという点を考慮に入れると、この説話集全体に流れている仏教思想からの大きい影響を感じさせる。中西裕は「日本「猫」の文学史序説(一) 唐猫の頃まで」⁽³¹⁾の中で『日本霊異記』に登場する「猫」について、「猫という動物には渡来初期から「仏教の番人」、つまり仏法の守護眷族というイメージがあったのではなからうか」と述べており、さらに『源氏物語』に登場する猫は「因縁」、『更級日記』の「猫」は「転生」という仏教的な観念を表徴しており、「中古の文学では、猫と仏教は親しいのである」と論じた。要するに、「猫は祖先」と断定はできないが仏教の世界ではほかの動物より非常に「高い位置に存在するもの」であると考えられていた。

韓国の供養に関する猫のことわざは他に「大人しい猫がイシモチをくわえ荒神

棚に上がる」がある。供えるために用意しておいたイシモチを供養もする前に取って、荒神棚に上がって食べるという意味で、日本のそれとは異なり韓国人にとっては単なる「泥棒猫」にすぎず、「憎らしい猫」の行動にしか見えなかった。すなわち、食べ物に目がない猫の性質を両国は面白くことわざで表現したが、特に、供え物に手を出す猫に関しては正反対のイメージで表徴されていることが分かる。

長い間、儒教の文化が続いた韓国においては、先祖の供え物に手を出す猫を憎み、愚かな動物の憎らしい行動とみなされてきたが、日本では供え物に手を出す猫を先祖のように人間より高い所に存在するものと考え、神聖なイメージを付与していた。このように日本の神聖視された猫は後に招き猫の由来につながりを持っているとも考えられる。

終わりに

日韓比較研究の新しいアプローチとして、ことわざ学と動物文化史を両者結合させて比較と考察を行うための基礎的作業として猫に関する日韓両国のことわざを整理・比較作業を行ってきた。以下では、暫定的ではあるが、これまで述べてきたものを改めて整理した上で、今後の課題について述べておきたい。

猫に関することわざに表れた猫のイメージを比較した結果、日本特有のことわざには「化け猫」をはじめとして「猫と女」や「猫の恋」に表徴されていた。他方、韓国特有のことわざは「泥棒猫」をはじめとし、鼠を捕らぬ猫や「憎らしい猫」に表徴されている。いずれも猫についた否定的なイメージを表している。また、日韓猫のことわざの全体を比較してみると、韓国の猫のイメージは猫の基本的な役割、即ち、「鼠を捕る猫」というイメージに止まっていることがわかる。しかし、日本の猫は鼠を捕る猫の役割から遠く離れた「愛らしい猫」、すなわち、「猫=女」、「猫の恋」という表徴と、「化け猫」という大きく二つの代表的なイメージで表徴されている。

韓国は他の国々でも多く見られる魔物としての猫、とりわけ猫の復讐に焦点を当て、近寄りた動物というイメージが強い。その理由からかもしれないが、筆者の子供の頃は、猫をペット(愛玩動物)として飼った人も少なかったし、猫

が韓国でペットとして定着したのもわずか数年前からのことである。

日韓両国における猫の表徴は、ことわざからの分析を踏まえ、猫を素材にした古典や猫に関する昔話をも含めて比較考察して初めてその全体像がみえるだろう。さらに、近代文学における猫の表徴まで考え合わせれば、時代の変化と猫の表徴の変遷の関係がみえてくると思われる。これらは今後の研究課題としたい。

- (1) 本論では「ことわざ」の日韓比較研究を行っている鄭芝淑の諸論考から方法的発想を得ている。とくに、鄭芝淑「比較ことわざ学の可能性」『言語文化論集』第二九卷二号、「日本と韓国のことわざ比較」『国文学解釈と鑑賞』至文堂、二〇〇九年を主に参照した。
- (2) 折口信夫「古代に於ける言語伝承の推移」『折口信夫全集(三)』中央公論社、一九九五年、四四〇頁。
- (3) 「なぞとことわざ」『柳田國男全集二』筑摩書房、一九九九年、および『民俗学辞典』東京堂出版、一九五一年参照。
- (4) 田村勇『サバの文化誌』雄山閣、二〇〇二年参照。
- (5) 北村孝一『ことわざの謎 歴史に埋もれたルーツ』光文社新書、二〇〇三年参照。
- (6) 鄭芝淑「日韓接触の痕跡としてのことわざ」『言語文化研究叢書』第九号、名古屋大学大学院・国際言語文化研究科、二〇一〇年、八五頁。
- (7) 順番で、新村出編『言林』全国書房、一九四九年、『広辞苑』(第五版)、『東亜新コンサイス国語辞典』、『우리말과 사자(国語大辞典)』。これらの以外にもことわざに関する代表的なものとしては、日本の場合、『成語林』、『故事成語諺語辞典』、『故事成語大辞典』、『故事ことわざ辞典』、『諺語大辞典』(藤井乙男) などがあり、韓国語の場合は、『俗談辞典』、『韓国の俗談用例辞典』、『韓国の俗談 大辞典』、『故事成語・俗談辞典』などがあげられる。
- (8) 北村孝一「ことわざとは何か」『月刊言語』一九九六年七月号、大修館、四八〜四九頁。
- (9) 前掲、鄭芝淑「日韓接触の痕跡としてのことわざ」、八五頁。
- (10) 宮島達夫「ことわざの言語学」『言語生活』一九六二年一月号、三八頁。
- (11) 孔泰瑢編『韓国の故事ことわざ辞典』角川書店、一九八七年。
- (12) 利倉陸「人間を映す鏡」『動物観と表象』岩波書店、二〇〇九、一五六頁。
- (13) 奥野卓司『動物観と表象』岩波書店、二〇〇九年、三頁。
- (14) キヤサリン・M・グリッグズが『猫のフオークロア』誠文堂新光社、一九八三年参照。
- (15) 同右、二四三〜二四四頁。
- (16) 鄭洵至「韓・日動物関連俗談の比較研究 犬と猫を中心に」『韓南大学』二〇〇四、参考。この論文以外にも韓国では日韓比較研究において動物を対象にした論文が多く発表されてあるが、いずれも「猫」と「犬」を言及し、犬は韓国人の情趣に、猫は日本人の情趣に合うと論じ、韓国では見られない日本の招き猫や猫文学などを例に挙げた。
- (17) 日本の飼い猫は中国から渡来したという説が一般的だが、仏教の伝来と同じ道をたどり、インドから中国に伝えられ、それが朝鮮半島を経て入ってきたという説もある。(袋小路冬彦「100匹のおかしな猫たち」国書刊行会、一九九三年。なお、木村喜久弥『猫 その歴史、習性、人間との関係』法政大学出版局、一九七三、一九八六、七〇頁参照。
- (18) 韓国文化象徴事典編纂委員会『韓国文化象徴事典』東亜出版社、一九九二年、五七頁。韓国では「猫」に関する資料が乏しい。それに比べて日本の資料は先行研究を含めて豊富である。これらの違いは「猫」に関する関心を良く例えている。
- (19) 『동태경』東亞親国語辞典 第四版 『동신문화』、二〇〇〇年参照。
- (20) 中西裕「日本「猫」の文学史序説(一) 唐猫の頃まで」『日本文学誌要』第三七号、一九八七年、七六頁。
- (21) 『史料大成』刊行会、増補「史料大成」歴代宸記 臨川書店、一九六五年。
- (22) 宮崎莊平「王朝文学に猫を見た」『国文学 解釈と教材の研究』第二七卷十二号、学燈社、一九八二年参照。
- (23) 神田洋「柏木と猫の夢」『物語研究』第四号、一九八三年参照。
- (24) 李基文『俗談辞典』一潮閣、一九九七年。
- (25) 木村喜久弥『ねこ』法政大学出版局、一九八六年、二八二頁。

- (26) 다른 세상, 二〇〇一年, 六〇頁。
- (27) 조희경 「韓國伴侶動物의 現狀と 実態」 『대한수의사회지』 四一卷一〇号, 수의사회二〇〇五年, 九一八-九二二頁参照
- (28) 韓國の最近の文献では「泥棒猫」より「野良猫」という表現を使っているようだ。愛猫家の増加と関係があるかもしれない。
- (29) 「日本靈異記 上卷第三十」『新編日本古典文学全集』10 小学館、一九九五年参照。
- (30) 同右。
- (31) 中西裕 「日本「猫」の文学史序説(一) 唐猫の頃まで」『日本文学誌要』第三七号、一九八七年、七五、八七頁参照。